新撰大系圖譜　二之巻

特別
へ13
3656
2

帝国図書館蔵書

大系圖蝦夷噺　二之巻

目録

第一　筆道の巻ハ古と面文字の界

石ゑ入て三分とかるゝ筆物

臺ゝ笠ゝ笠ゝ代てゝ大筆ゝ彩

内野所蔵

特
へ13
3656
2

第二　学問の宗迦八佳の言葉

井出の山ざくらかるる男子哉

ひさとしる思案ふかい沈の相好

第三　料理の手際上先の働

振治屋の合縁ちようての

あんどいこん出ハ粉ぐ粉子の吸物

一　筆屋の会ハ面と面の字の界

笑話の紙人をおよがせてなるだけ。それをつゆてハ

の場をあけでもむるなり。和俗書てもまわね

ばり。らねる紙紙去とくんぜる所のつぎ紙名。

たてと一字の毒の字。とりてさの自慢うる大字。何

のうあるなるもでも。思ひかるもと書ハ仮名。一すの文

字ハ。ぬ。紙者の青の字も。までうけど七百ある

ど。真の時ハ絵自六百じゃとりてるよ人ようで。

彩色形の字形の形。ちしまハめぐらぬ。大黒

屋治兵衛といるハ。京都うそ人もちうる店商帳

とも不義をしてやるよりあつきうつと商売うち出し。よく代あまくこをうくべく。正月十日戌の板よハ店されの作の系あぎやうる。大福帳と表紙一ちいう。もそぐのありぬやうに出ぬぼくそうく筆をがやつて見てふうり。虎とゆなの尾をひくくとうゑくせ。作の字に節をつけて。尾のつるり拭を。長筆立筆に仕立白模の就虎に木で眼をつくる。出でまらくる西れのあるホでうきれど。ついさそうもそくるぬ筆勢。それぐ国じて王板へかう。水出の板字文おぼくしうる。あ海をそう筆先雲という。米俵のちらくしうる。帳の表出の表人の涙出ようもくがようけて。王義をたれも非に祝る名ぶう。係解ようそひかんのうやまひかうんと。なるさ

まとでそくくとそう。橋もまてえれど。ていまぬ世の中と衣やうハ拭やうられぬ紙染とうう。中なれの着板を自筆とたる。亀と書あるそくるる。切角ようあるる社と出ぐづしに多ろ小ま。よつどひ繁昌よつけて。赤山ての大字舎まくうの作くて。その日ふを。ゆれど筆先ぬ生。且れちうてかうる系拭やひの三まいぐ。中おを二行にあるませ。筆大筆をと出刀のかりにうづくを。あとうハつめのくるみ筆へ。硯毛鍾とられさせ。一町あるうもせるが。筆礼とれちぐて。龍仏のあげでうちん二張。巻中よりもせうもおうしうる。拭赤山珍仏ふへ。幕とうもせうもの中ふ。今やおそくとざハつく不へ系拭おろせど。筆

行楽梅月
まづあをあげまをふ
ぢーたさりぐ
これきつけよく

ぢーたくんとしてきりつぶを
もいえをいきがされる
さてもいそがぞく
げらるごよのりいそぎ者
そじゃく
東山の屋敷をたて大文字の舎

もはん紙上ゑにつき。そのうへにて墨をすりて墨いづきを
ぬりくるに唐紙へのうちつけ書。墨よ張をくべて扨
刑部中。弟子のうちに。むりの弘法大師へ。
あるとあるに筆をとりさみて。一時に地をとりまて
ゆへ。五筆和尚と今よ名たり。何ともそ先生ともあ
て。三筆の四名などのうをとりて。筆を大きま
せいてまぶ筆に弘法大師よりまんや。さうで曲筆よ
のまてさんいづきものお用よくべし。弘法大師よ
筆の名あるべ。第七六筆の書如とあるもえ
せんと。筆よ筆とらくあるよ見まる。筆をとら
つけ。ぬりて六筆のうち。今一年のしさみ不よこまう。
耳へも鼻へもたさみぐらく。偽よ見ひ紙を中筆一年。

魔の穴ひつたさみ。唐紙の上へうつてあるつ
筆をとりくかんとかとられるうへ。ぬとあるのうと
らさ一時よくはまる。まりのうちとどうとつきるも。
まりまたさみる筆。神とまよ用へいりられ。あるく
くん生用をまくされ。やまと医よ行後よ。大さい
だの中まも切んるる男ありて。外の医よでハゆまい
と言門町よ行る。藤医よをまねき。容形をえをせけ
まもひまり。藤筆まとやはうをはうけたまりしが。定
筆とやはで今ぐらでめでぐらく。ぬげ中さの青
素とらんとまれた。七ハまだりの筆ぐ。さあこげと
まりてまりまだいりてやんとりの門先生やりく筆も
つまて。今まを魁の下ぬりしいづきるお世張よあさ

きてはさうてるぬいみ一への主義をといふる彼古へわを
ま筆つく。石へ板と云ふる。石に入て云ふと少
つ人ふ。ふるる見主分たい。鹿に入て云すわまりれ
で。主義之ま白さうふわりとねじ。ぐ今れそ
も。筆たの冥加ふるひれぐうき世見ひあ。
さうまるきうとんだ。中子中へ一流のみ少と。師通
夜の石ふとまるこびるる門も。外粉筆の独を
引ねけで。ちぐくまぐらひみぐ。その中子中ふ云
筆和尚とうやひいよく伝わさうざりる。さ
きで氏先生方ぐふたのまま。看板をのきれ
るが。ある時さる大寺の楼門の額とうけみぐかりて。
あぐふすさ和ま。屋根の上ふ細引とうさぐ。

六筆先生のきる相の孫に縄とつけて。ぐんの細引
ふて富ふつうさげ。筆ふ墨をふくませてうせるふ
間も脇を乞も彩に。そそん。ふまやあぶすと思ひく
額とうさる。さ楼門あるさくして。夜ふうさ時
ま額ふ下に。雲とうるふて即。夜雲楼とふ額
るふ。先生まはいうさ。はるうすれども。文盲芸能
ふく夜雲楼の。夜のぐまのうらをむすびられだ。夜
雲楼ふ成ふう。夜といふまもあのまも。りくいひとつ
とおがくるそ。それふ世とふ。夜雲先生とまびゆ
ふ。ふすやおそふ一やとやひひ夜雲先生とまびゆ
まおふう。ふるひいぐ少。そふ一の内ふ中風
いよく自慢やまざふふ。

六筆先生の。きる相の孫に縄とつけて。ぐんの細引
ふて富ふつうさげ。筆ふ墨をふくませてうせるふ
間も脇を乞も彩に。そそん。ふまやあぶすと思ひく
額とうさる。さ楼門あるさくして。夜ふうさ時
ま額ふ下に。雲とうるふて即。夜雲楼とふ額
るふ。先生まはいうさ。はるうすれども。文盲芸能
ふく夜雲楼の。夜のぐまのうらをむすびられだ。夜
雲楼ふ成ふう。夜といふまもあのまも。りくいひとつ
とおがくるそ。それふ世とふ。夜雲先生とまびゆ
ふ。ふすやおそふ一やとやひひ夜雲先生とまびゆ
まおふう。ふるひいぐ少。そふ一の内ふ中風
いよく自慢やまざふふ。

二　家学の宗道八桂の家代記

やまあと家ハ。人の日記ねとるよりすぐるる
学の種なり。儒のまさごいとみつるもそも。浮世のた
弥いよいよ世をうぐ。京の中を無双ぐるく珍
めづらしく。人のおとしめ捨世流あり。白河よこと
とをうしてうぐとみめづらしとまり。磯よりもせ
て。麝水晶をつらるものもあきだ。物でなりたまま
らきぬとなるもの。伊勢の山田わらまでい。鈴一
弾と弾一文ら二文ほうきめて。きぐんてわりく去あり。
今ハむうし陸奥御師といなハ。そのものをうしの
高人ものしぐ。安倍の風歌。それ。流行ある家

地ほ屋をもめ。百人一首一紙のおきもゆ。まして
万葉集源氏物ぐらまか。ひぐ。廿一代集の撰ま
とをんだ。ほ帳出さねぐ。返答のうね仕合ぐそに
ほハ家学者とヤと。家ものとヤひがわりとい。その楽
うくものぐやとぃんんだらうぐ。和学の舎ふ
て学ぶよつ付ハ。ものうとまりて学をるる。東学
うそい稽ぐくれく。ものを少なるほ。稽もひね所
人右性の。舎ほものうとまりして。花笑の和ほと
弥学るる四ぐ。下学でも引ぐりて。かくハまん
学の学さぐれ流ぐ。麻布学ぐ。百ほ楽
宗通学まる。随学ハ通眠。家性ぐものひとと。

東行者と名づけ。何ぞ、そうしひるといとねだ。人ぐ
ちりひつりぬゆく。そろく古京を経じ。風雅集をそ
まその外。その百ぐ一の場へもいてこそ。源氏物ごろの
こゝろ一ゞ出きだ。嵯ぐとて名い。光源氏よいも
来そしこと。初こ新よこだ一えの中ども。いろみも
さこそでざりけする。こつせそいわけごこじやとや
けする紅よ。たこあかうでこれざりゆしつこんと。
紅てもつうぬえゆはれども。ちここ家こみじやと
いふようて。扇いそうこいていそ中ふるのえく。
門お前を苏子賣春屋まで。紅葉をこわ添
削とこるけ。さあ金まくいくで中ふの扇てある
家の内まて仏このこきこと。中えの名でいまど。

此格はこいとりふて。ワゞ新の通向へこうこむ。きのは
こふよ招の師逝ぶとしても。子はまあ名の信とおど
ぞ。色不の紙屋こう。元賣ふこるを古こび若いものたゞ
上ふこと思ふて。こうこひよゆけだる砂田村の新いあ熟
ふ句へて西まで。外百義のうちとのぞきて。外部
えここうぬこうひよふ句。今こうこ外をひらこひいこう
こうこび。内百義をまあこれそこうのこすとりの新。こう
で義日龍神をとそこまあの新こう。こひ中引出
してこうひくまで。此師通辰義日結神。つかよう
たふこさまの。こうまだとて古こねといこそこび。こう
ど一ふこうこひまこよと。こむこひよ中を中ふ新て
こうこふよ。借白中ふハ新こそ。まへどこうこひ新こる

飯まで。節誘よ帰さんねども。師遠方ハ不ぐまで
ゆきつまゝ生。奥よりいろ八大誘まの名の波一名よ
よめびやうく。光みよりぎりまで。汗をいてう
さひきまひみがゝ。光のうひうさよ。ふすいふた
ぞひとむとしく。大うさのうハ光みよ智ふて師
遥の義のあがるす。きあゝまくみうび。遊雲
法師思業ゝ名ハ。大ていのうすでハ今時名ま
うれぞさうぐ。秀ハ白をひとうまて人丸赤人
ともうぐうて孤よ。世よつうべゝといろく工夫
ゝ不俗旅をして。乃中うその百首をよまぐや
と。日ゞ廻廻ゝうそと。を不へいとみ先をう。奥の
夏人引うのがうやゝ。百首ようこれぐ。

拙之屋とゆくことうゝれ脚まで。ぬきぐ却入おり
とうれが来ても。を方へまいゝきまゝとゝいせ
て。実天よ船を干つけ。塩あをとうら主。わゝく
船へ却て。漁船よあつろゝ新よ作立。塩あをて
ゆきうる船を。日よ干ける六七十日。面皮うそく
ともけて引ちるいうきうゝうぐうれた。ゆてが風
新をうぐる不と。続まひて見れぐ。月毛をうを
うる小遠ひ。毛よ田ようけて塩あをを新うるの
ゆゝ。雑のようるす。ちりめん細工の猫のごと。
毛でいうぐと。ぬきよわぐひとあてそのうゝう
火のゝとうけうれぐ。やゝく。穀八のびうれぐも。
用に引つてきゝぐゝ。改泥紙よ何ぞめ

づゝひねとゝいきさいと弱さもしよ。ある人宮家
門の扣をまいりうる笑じやとそ。かゝ扣て居る
と応接いるそれども。金を出すよ賞とり。幡丸の
つるれゝ猫木杖と賞て。通坂と名づけしを。紙
百間よりしめ。西洋法師ようてさそうし。木綿風
呂敷ありとゝふを。見ハちとる出されたこゝ
そのゝ。ぞ見ようもあきうゝ。紙板の木ぞを。
見ハんよハつけよあまのつゝ紙と。小型の巻のよ
後ようゝ。そのつゝ紙の古くなるねと。別して自慢
し紙の間よ宿を出く。紙の引わけよ二三町も
まちり。只今まつうるうゝとゝちとてびきうる
ていよ。ようゝしてを所くさよれど。紙もゝ出不

風よおあひあさまさゆゝ。紙ぐうこまたとゝ不
時。そゝめておちつき。百前のゝこゝ紙を。世とよ板屋
しそれゝ。めうこうと出子も南うゝそれより町住
んまそまゝ。清ゝ紙ふゝ百姓家の。屋根まゝを
賞とうまゝ。ゝゝきかうるやうゝ。教室を
うまゝ式屋紙。天智天皇の。秋の田のうかれ屋
ゝ。ようまを紙ゝ。山科色うる見いゝ世し
と所ゝ。ゝゝとをもうておいて。夜のゝるやうよ
去ゝ。ゝゝ。ゝゝ今よ。紙ゝ。ゝゝゝゝゝと。ゝ
のゝきうゝとゝよひうゝ。ゝうゝ。ゝ人何とゝ人
のゝれゝゝゝゝゝ

蛙とあてゝなぶると学生。ふるよゝのふる
ゐ中。玉ゐゝ花瓶とやりて。外山その蛙ゐいろ
もせさいゝゐ客室のうしろよりまい狂蛙のゐく
ゆのありゐれど。それくゝゐ
ゐけて。外山の蛙とゐゝ
あゝといふ。ゐの新向を窠じ居るよ。ゆとよ
蛙一ゐもゐざりゐれど。ゐ拍ハゐゝそハきゐと
ゐふて。ぐんじ入て居るふ。ゐのどくや新よ入て。蛙
のゐくゐまゝまゐゝゐ。と食いれさせる外山その
蛙ゐゐぐけ。おゐく鳴までの遠ひまて。ゐ中
さまゐゐれた。切角れゐよやゐる俗のゐてまゝを
あり。あきゐけゐの蛙ゐて。井山のゐぐよつき。

て部が居ゐふゐゐ。ゐ
新向のひゐゐて。ゐひゐゐとゐふゐゐゐと重て。
あんじてゐゐゐゐゐん

㊂ 料理の手際と先の働

むゐゝハ胡麻蕎麦ゐて菓をきざみ。大根ゐて
さゐゐ新とゐゐる。ゐゐゐわをほわゐゐ。
今ハ細ゐまざる料理へ。何しやゐんむさゐ
ゐゐて。黄蔬ゐる人ゐ。いゐゐ独ゐゐれど
ゐて。奥ゐだゐつひけゐる。ゐでゐる新を
い田舎めきゐるゐてゐゐゐゐんゐび。ゐまゐゐゐくと
ゐゐるあんじいハ茶屋めいゐとそのゐまねを

ずいぶん法師
あよりてまいんまる
ちゃを
おあんじまる
ちゃうがうるまぬ
このあを
ふくこの
めづやゞ
うぐひす

ぐずのこの
ちいのとい
ちゃれるう
もしかしてまいりましたかうね
げんいどうござります

の中。とうく容よりて。拍ぢきもちゐぶ。ぶ。八
幸をのはゞつかそまくるものして。点ーをうに
すれど。おもかるはよわいしらへ。幸ーをわぬそう
なきど。密ととあ〜らいはまるす。大うらづ方
もおかるふやいなかうさうすゞきいとそ。蛸
のゝおりう。幌のあ貴も。貴飯ハしがう。ちてよ
那三条ゑよ。梅井挿倉とふ医者。生貴て科
ひとあのこのう地の間うても。献立のこよちゐとつ
う。病人の脈脇ふ間も。さし糸ふあしひ雑い
ア泡ハあまをゞそれど。蓼硝ゐどのすのう業
の死剛も見よひうく。見ハ證治準縄の方なれ
ど。見へ生系一庁とハ古しとて。山茱よちくてさし

つまれど。病故脈とつぶ。英紫よりびやそ。
あまりうんざすとふ人ども。たり医者のとうき
だ。りや古方みもあるすとのまそてんうよ思ひ
のみ。むゆをもう食をまめ。効験ハ医業の外
ふふ人て。敗毒散などをあるみも。十二月のちどめ
ひう。正月二月までハ。獨活とつ人た。三月るその
うどハ世ふみも沢山るて。病人への地をよるう
ぞと。四月のう入くん。獨活のうりる。竹筍れ
うん出と。揚ぎりみて。上ーとふれど
耳草をいれど。番椒の粉といま。ふぐこのき業と
小根みて。うもくとぬる。仕ーけさもれど。お
のくうぐはよみう。病も活し。繁昌おびうし

りうりう。さるまさぐひて。贅言とかうすつく。
殿上のこいまつりけてい。料理人ま名あるとくめづ
らいうまをとのこ。つぐらるおりあ〜その薄ま。あま
ひちいさいやりまをめぢとそ。世ろくく美名をつ
けて。小脇差とまぢて小刀脇差あり。銘まは四本
康小刀宗通石敬守来金無とこりろぐ。是も
料理とこのこ。ふいご祭ま蕎麦こりと。うつ
ぬこげうる相ぢこいりり明神松も方こそぷ夏
ゆ〜はあぐりあせらぐし。そことそぢこりと切
久祢ぐ。ぷ地走ま。ぐ。とのうんぐそ。世の色ぢの
ぬりりるぐ。後ぢまで足ま。ん。輝高ろこび是
いくさいまぬ。ぐ今小ぬ同色くく。あまりくい粉ま

とりひまこと祝ま。うるまひませうぐ。帯ゆま
ぬこてこ。あへのまるこりぬ。ぬい男ひ
つぢもなこと。来金色ぐいるへ。粉ぬの吸
相とこりぬ。つのまうけりこぐ。何とすけ
みてこれそ。ゆんじまねこ。是はあも
し強いこぐ。まり山椒とこけさそ。あんぢい
まこと。吸相椀へこそ出へと。章も客も
笑とそて。相ぬまこぐ。ぬ粉まを
こりて足るま。石ぬ鉄ぬそつりうぐく。中く
歯のこぬぢさてこまあぐ。ひひこりそこ
ても。まりてこそも。鹿猪の牙とりと移ぐ。かこ
あるぬぢさやうぐ。ぬぐて粉まへ。ぬまけ

てハくすりのよわくして。見わすれハ
それども。劑法よきゆゑ。ありて。養てハくすれ
ぬものといふなり。さる矢ゆゑ。されど医術
もものとりて。薬とハ。そのくすり劑
法あり。見よわるう。病ありて。真場をもつされ
ど。勇ようして。酒劑。塩劑。膏液劑などの。
くすりをもへあるゆゑ。救ふいしゆゑ。ゆゑ。
ものを劑とハいづれハ。ときはなるもの。
あうれどいうもざる。医師の秘法ずさハ。医師
の劑法よあらんとの。ありひとりて。方
薬よのを立矢をとうし。つみよ名医のかまき
をとうう。薬金をもよ。悟たし。わかとの

矢あらを製ぬし。矢よほうくうを場とよく
くをさ和をおがへよの名を元るとうんか
ちを矢ぶとい海うりへ。きんめてくこいうるまん。
海うりうぐう。毒をしうる。元ざなでくくこ。
経用おそくくんもんまり見を製情白梅ぶ
くをさだ子細らうて。牧みの吸和のどく。真も
さもるうべし。四ちを矢ぶとう。元そくさんへ
ぐくをそうてるもどども。女まどくくのふでハうる
人よををこちどするうれだ薬もか識人をおの
遠ひて。生死へうり。緩法もんの刑とする和と。海ひし
て和をきれう。ものを世とのうあくめとうん

二之巻終